

同推くん

号 外

特集号

発行所：海蔵地区
人権・同和教育推進協
会発足二〇周年記念「人権を考
える集い講演会」の抄録です。

…講演会抄録…

いのち

生命の尊さに目覚める

私たちは日ごろ仕事や暮らしに追われて、毎日を何となく過ごしがちかも知れません。しかし、いのちのすばらしさに気づけば、新しい生き方が見えてくるのではないのでしょうか。たくさんの人から慕われている青山俊雄（あおやましゅんどう）先生に、「生命の尊さ」についてお話をいただきました。

この講話は、去る一〇月八日に海蔵小学校の体育館で開催した海蔵地区人権・同和教育推進協議会発足二〇周年記念「人権を考える集い講演会」の抄録です。



いのちの尊さを目覚める
阪神大震災の十七回忌を済ませた今年の三月、またまた東日本で大震災が起きました。人類が昔々と築き上げた文化を一時にして崩しざる大自然の摂理の強さを思い知らされました。この地上の一切のものが等しく天地いっばいのお働きを受けていることを忘れ、弱小動物を滅ぼすことで欲望、快適さを求め満足している我々の生き方を改めて考えさせられました。

長野県の小諸の懐古園にかつて「草笛説法」で知られた横山祖道さんという方がお見えになりました。横山さんは農家の納屋に寝起きして、懐古園に毎日通われて、笹が五、六本立つた前の芝生がお住まいというわけで、そこで座禅をしたりしておられました。以前、テレビ番組の下相談で参ったときのことですが、懐古園の中の枯れ草・枯れ枝を集めて、笹やぶの前の芝生の上にナイロンの風呂敷を敷いて、「さあさあ、こちらへ」というわけですね。

そしてそこに欠けた七厘に、集めておいた枯れ枝をもって火をつけて、手のおれたような鍋に水を入れてかけておく。そして、一生懸命煙を私の方に向けてあお

いで、「電気やガスの今の時代に煙はこちそうだからね」と言われる。そこで話してくださったのが、「この地上に住むすべての人も、動物も草木もみんな、大空というひとつ屋根の下、大地というひとつ床の上に住むきょうだい、仲間じゃないか。それなのに、境界線を引いたり垣根などつくって、自己と他と区別するから、取ったの取られたのという争いが起きる。みんな、大空というひとつ屋根の下、大地というひとつ床のうえに住むきょうだい、仲間じゃないか」と。そんな話をされたことが、今も大変心に残っております。

そして、目の前にそびえる浅間山も富士山も、わが家の築山だとおっしゃるのです。豊かな話ですね。宇宙いっばい、わが家の庭であり、わが家の築山であり、どこに咲いたんぼほもわが庭のたんぼほなんだと。そんな豊かなお話なんです。

子は親を見て育つ

教育界で生涯を過ごされた東井義雄先生は、よく教育の世界のことを農業にたとえられました。農業をしつかりやっている方を、上農、中農といういい方をし、その言葉を使って、「下農は草をつ

くり、中農は作物をつくり、上農は土をつくる。教育の土づくりは親づくり」だとおっしゃいました。子育ての一番大事な土台となる、家庭、親、大人の姿を問われるわけでございます。子どもに残す最高の財産は、ものではなく、親がどう生きたかではないかと思うのです。

平沢先生は、こうおっしゃっています。「私も、生まれながらにして百四十億という数の脳神経細胞をいただいている。だから、全部の人が天才になる可能性をもっている。ただ、やれないんじゃない、やらなければならない」と。育てなければ等に等しく、これを一生使っていく土台作りは、三、四歳までで完了で、その後では手遅れだ。

インドで六、七歳まで狼に育てられてから発見された二人の少女のお話はご存知だと思えますが、いくら人間の言葉や暮らし方を教えてもダメで狼の域から一歩も出られないまま十歳で死んでいきました。人間の命をもって生まれてきても、狼に育てられたら、狼になってしまふのです。しかも、三、四歳という苗床つくりのときは、本人では何ともならないときで、子どもを育てる大人の責任、親の責任は大変重いということです。

生かされ生かして生きる

地球と太陽を結ぶ距離は、一億五千万㎞だそうです。この距離の間隔をちゃんど保っているからこそ、われわれのちのあるものは、こうして地球にいられる。近づいても離れても生きていけないのです。さらに、大気が二十㎞の厚さで地球を包み、温暖の調整をしてくれているお蔭でこうして生きておれるのです。天地いっばいの、銀河系の果てまでものお働きをいただいて、猫も鳴くことができ、鳥は飛ぶことができるというように、天地いっばいのお働きをいただいていることに存在するという、いのちの重さということにおいてはすべて平等です。私たちが、一息一息呼吸できるのも、心臓をドキドキ働かせているのも、天地さまのお働きのほかの何ものでもないのです。そのことを信じようが信じまいがにかかわらず、忘れていないとにかかわらず、われわれはそのお働きなくしては、一刻も生きておれないのです。これが「一即一切、一切即一」の相互の世界であり、生かされて生かして生きる。天地の存在のありようなのです。

幽霊の教え

石川県松任市に本誓寺という浄土真宗のお寺があり、ご縁をいただいて時々お話に参ります。このお寺は千年の歴史をもつそうです。浄土真宗は親鸞さまがご開祖ですから鎌倉仏教で七、八百年前のごことです。由緒をお尋ねしたところ、もとは天台宗の名刹だったというお話でした。鎌倉時代に親鸞上人が越後へ流される途中、手取川が氾濫し足止めされたこのお寺にしばらく滞在されたのだそうです。その流罪人である親鸞のお人柄に惚れ込んで、名だたる天台宗のお寺が浄土真宗に変わったというのです。親鸞さまのようなすばらしいお方になりますと、その方のおられるところがどこでもお浄土になる、すこいお話ですね。

この本誓寺には、千年の歴史があるというので、たくさんのお宝物が伝わっています。この宝物の中にすさまじい目をした幽霊の絵があり、幽霊にまつわるお話をご住職の松本堀丸先生から聞かせていただきました。

幽霊には三つの特徴があるのだそうです。一つは、おどろ髪を後ろへ長く引いている。二つ目は、両手が前に出ている。三つ目は、足がない。

そしてこの三つには、それぞれに意味があるというのです。おどろ髪を後ろへ長く引いているのは、済んでしまつてどうにもならないことを、ああするんじやなかつた、こうすればよかつた、といつまでも心に引きずり、心が後ろばかりに向いていることを表しているのだそうです。まさに闇から闇へという姿ですね。

両手が前に出ているのは、来るか来ないかわからない未来のことに対して、あなつてもらわれないと困る、こうなつてもらわれないと困る、と取り越し苦労をする姿、そして、足がないということは、今ここに両足をちゃんと置いて立つていながらも、心が過去や未来に飛んでしまつて、大事な今ここを取り逃がしてしまつこと。たとえば、講演会などに行つても、おうちのことを考えた時、おみやげのことを考えたりして、上の空でしか聞いている。そのお話と出会っていない。心が常に、今ここから、どこかへ飛んでしまつていっている。そういうような姿を足がないという姿で表すんだというのです。

この幽霊の絵には、もう一つ面白い話があります。

日本一のピリッコ

私の尊敬する先生のお一人に、米沢英雄というお医者さんがいらつしやいます。お孫さんは幼稚園で、運動がからつきはじめなんだそうです。この間の運動会に、一番びりっこで走つていたというんですね、その時、そのお孫さんの前を走つていたお孫さんがころんだのだそうです。

そうしたら、孫のやつ、そのころんだ友だちが起き上つて走り出すのを待つてやつて、それを確かめてからまたほつぽつと走り出して、まためでたくびりっこになつたんですよ。親も親で、そのことを喜んで話してくれましたね。ハハハ……と嬉しそうに話してくださいました。なんとも嬉しいお話として、私の心に残っています。

今どきの世相だと残念ながら「あなた、ばかだね、その時追い越してあげば、みじめないや？」と叱りかねないのではないのでしょうか？勝ち負けを抜きにして、そういう暖かい子どもさんの在り方を良しとして、ほめて育てようとする親の姿は、なんとも嬉しいお話なんです。

痛をいただく

北海道の浄土真宗のお寺のお連れあいの鈴木章子さんという方が痛で四十七歳の生涯を閉じられる二十日ほど前、おうちで静養されていたところ、ご住職が「夜、私が知らないうちに息を引き取るといけないから、同じ部屋で、横に休む」と言い出したそうです。章子さんはそれに答えて「一緒に休んでもらつても、いざというとき、一緒に死ぬるわけでもないし、死ぬことを延ばすこともできないし、かわりに死んでいただくわけにもいけません。それよりも、お父さんが疲れてしまつてはいけない。子どものためにも、お父さん、体を大事にして欲しいから、一階と一階と別々に寝ましょう」と言いました。そのときのご挨拶が「おやすみなさい」という時に残されています。

お父さんありがとう
またあした
会えるといいね
「ありがとう」という言葉の中には、二十年、三十年、ご一緒させていたことへの、お礼の思いもあります。「またあした会えるといいね」という言葉には、一晩のいのちの約束がない。明日の朝を必ず迎えられるという確約もない。今夜お迎えが来るかも知れない。朝を迎えることができないのかもしれない。という思いが込められている。

すさまじい目をした幽霊の絵の前を、お話を聞きに来たおばあちゃんお一人が行きつ戻りつしながら「うらの嫁の目だ」とつぶやいたというのです。金沢介で自分のことを「うら」というそうなので、このおばあちゃんは幽霊の目をうちの嫁さんの目だといったわけですね。

別の日、別のおばあちゃんが幽霊の絵をみながら、「うら、あんな目で嫁を見ていたかなあ」とつぶやいたそうです。うちのお嫁さんの目だという人と、私にはあんな目で嫁を見ていたのだからかと思う人、この違いは大きいですね。あんな目で嫁を見ていたのだからかというおばあちゃんの背景には、長い間の開法の歴史があったのではないのでしょうか。長く教えを聞かせていただき、教えの光に照らしていたことで、凡夫の目は、非に気づかせていただく、凡夫の目は、人の欠点を見ますが、仏さまの目を頂戴することができたとき、わが非に気づかせていただくことができます。ここがとても大事なことに思えますが、たいへん難しいようです。

いすれにしても、幽霊の姿が示す教えの素晴らしさを、わたくしどもはしっかりといただくかなばならないと思致します。

(文責・広報部)

